偽　使

田代和生／六反田豊・吉田光男・伊藤幸司・橋本雄・米谷均

一、はじめにー偽使の定義
二、偽使の指摘
三、東アジア海域史における偽使研究
　1、「夷千島王」論争
　2、「琉球国王使」論争
四、偽使研究の新展開
　1、図書と木印の発見
　2、「朝鮮遣使ブーム」論争
　3、偽書と僧侶
五、今後の課題
　1、現存資料の科学的分析
　2、『海東諸国記』等による名義人の確定
　3、偽使を支える人的・経済的基盤の解明
　4、朝鮮王朝の偽使対策
　5、世界史的視野から偽使研究

一、はじめにー偽使の定義

「偽使（ぎし）」とは、朝鮮王朝から正式に通交を許可された者以外の第三者が、あたかも正規の使節（真使）であるかのように装い、公然と通交貿易を行う者のことを指す。たとえば室町時代の足利将軍が、朝鮮国王へ盛んに「日本国王使」を派遣したとされるが、それが実は真使ではなく、将軍のまったく預かり知らぬところで「国王使」を装った偽使が編成され、朝鮮王朝から正式な接待を受けて国書を交換している事例がいくつもみられる。朝鮮側から公認された、それも高位の者の名義を騙ることで、より有利な条件で通交できるよう画策したものである。

ただし偽使の形態は、多様にして複雑である。偽使の実例に即して類型化すると、大凡つぎのように分類することができる。

①真使の通交名義を詐称する場合

②実在者の名義を詐称する場合
③架空名義を創出する場合
④真使の通交名義を借り請ける場合

類型①は、前記の偽「日本国王使」がこれに当たる。このほか、たとえば大内政弘が、1467年に始まる応仁・文明の乱のため京都へ滞在している時期、公然と偽「大内殿使」が通交するように、朝鮮側から特に信任厚い使節が選ばれる。類型②は、実在はするものの朝鮮への通交歴のまったくない人物の名義を勝手に詐称する場合で、これも応仁・文明の乱の最中に「畠山義就」の名義で通交した偽使がこの事例に当たる。類型③は、実在しない架空の人物、あるいは架空の国や島などを創出し、その主を騙って通交を行う場合である。たとえば、「夷千島王遐叉」の名義による偽使がこの事例となろう。

類型①②③が完全な偽使であるのに対して、類型④は真使と偽使との間の、いわばグレーゾーンに属する。これは正規の朝鮮通交権を持つ者が、その権利を使用料と引替に第三者へ譲渡する場合である。たとえば松浦党の塩津留氏が、牧山氏へ名義料を支払い、牧山氏の通交権も共に使用している事例である。実際の通交者は偽使であるが、それが公認された正規の通交者の合意の下で行われている点が他の偽使と質的に異なっている。

近年、日朝関係史研究の進展にしたがい、こうした偽使の往来が、とくに15世紀から17世紀初期にかけて顕著であったことが判明してきた。偽使の誕生とその横行は、日本側の問題だけではない。200年間以上にわたり、なぜこうした「虚構」の通交貿易体制が維持されてきたのか。「偽使の時代」は、東アジア海域全体の歴史像を大きく修正するものとして、その実態解明が求められている。

二、偽使の指摘

中世日朝関係史ではじめて偽使の指摘がなされたのは、増田勝機の研究による。増田は、島津元久名義の朝鮮通交が、本人の死後から開始されている事実を指摘し、室町期における南九州地域の朝鮮通交者名義が、第三者によって遣使された可能性を示唆している〔**増田勝機1970**〕。

ついで田村洋幸は、14世紀末～15世紀前半にかけて、日朝間に偽使が横行していた事実を具体的に指摘する〔**田村洋幸1972**〕。ここでは、室町前期から大豪族の通交を偽称する者、あるいは対馬宗氏を利用して詐偽行為を行う者の存在に注目し、その主体は商業資本の豊かな貿易仲介業者や零細な辺民階層であったとする。田村の関心は、主に偽使を担う者たちの経済的背景にあり、日朝通交における偽使の初見を指摘するなど、後の本格的な偽使研究の先駆けをなしている。

偽使の指摘がより鮮明になってきたのが、三浦の乱（1510年。冨山浦など朝鮮の三ヶ所の浦所

に定住した日本人による暴動事件）以降、対馬による朝鮮通交貿易の実態を考察した研究においてである。その端緒を切り開いた田中健夫は、対馬の史料『朝鮮送使国次之書契覚』を詳細に分析し、朝鮮通交貿易権が対馬へ集中していく過程を考察した〔田中健夫1954〕。この研究により、田中は16世紀の朝鮮通交における貿易権が、受図書人（朝鮮から銅印を受けた者）や受職人（朝鮮から官職を受けた者）ら正規に渡航を許された名義人の手を離れ、対馬宗氏や家臣によって管理・運営されていく実態を初めて明らかにした。

続いて中村栄孝は、天正年間（1570～80年代）に三度の朝鮮渡航を行った「右武衛殿」の遣使について考察している〔中村栄孝1959〕。従来、この使節は織田信長が足利義昭の名義を借りて行ったと考えられてきた。しかし中村は、この称号は本来、九州探題渋川氏の遣使であるとして、織田信長遣使説を否定する。その上で、この使節は対馬で通交権取得のために架空の人物「右武衛殿」が創出され、それに仮託した使いではないかと推測する。中村は、さらに16世紀の日朝関係を体系的に論じた〔中村栄孝1969b〕により、対馬における偽使派遣の実態について触れている。そこでは、朝鮮貿易の基本体制を存続させる契機となった対日約条の変遷を明らかにし、歳遣船（一年間に派遣できる船数）の定約や、約条の更定がどのように展開されてきたのかを朝鮮側の立場から考察する。中村も田中同様、『朝鮮送使国次之書契覚』に注目し、対馬側の朝鮮通交体制の継続維持と貿易に関する諸権益の集中により、偽使が日朝間で独自の地位を確保しようとしていた具体像を提示している。

偽使の指摘は、さらに個別研究の積み重ねによって、細部にまで踏み込んだ議論へと展開していく。なかでも長節子は、福岡県の神田家に伝来する16世紀末期の二通の書契（外交文書）「田平源兼宛朝鮮国礼曹佐郎申光弼書契」「朝鮮国礼曹宛田平源兼書契」から、ここに登場する「田平源兼」なる人物は、対馬が朝鮮通交の権益を拡大するために肥前の地方領主をモデルに創出した架空名義であることを明らかにしている〔長節子1977〕。長は、さらに16世紀対馬に集中した朝鮮通交権がどのように運用されていたのかという実態を、「牧山源正」印の所務者塩津留氏を例に分析した〔長節子1982〕。ここでは、三浦の乱以前、既に塩津留氏は名義料を支払うことで独自に牧山氏の通交権を入手しており、その後の対馬亡命に伴い塩津留氏は先祖伝来の朝鮮通交権益の一部を宗氏に譲渡するものの、依然自らの通交権と牧山氏の通交権を保持し続けていたことを明らかにした。従来、対馬による朝鮮貿易権の独占という場合、名義人の権利は完全に喪失していたかのように考えられてきたが、一部には名義料の支払いという形態などで形を変えながらも関係を継続させていた可能性も出てきた。従来、『朝鮮送使国次之書契覚』を主要な史料として説明されてきた偽使体制の実態を、実際に日朝間で取り交わされた書契や、他の日本側史料によって裏付けた初めての研究として注目される。

偽使は、豊臣政権さらに徳川政権といった統一政権の誕生後も、存在が確認されている。たとえば文禄の役（1592～93年）後、講和交渉にのぞんで豊臣秀吉が和議の7条件を提示した「明使」は、実は明の宋応昌らの画策による偽使であり、さらに1596年の明使来日に際しては、小西行長の配下の武将の内藤如安が、秀吉に内密に明皇帝の勅書発令を願う偽の「降表文」を上程

したことが〔中村栄孝1969a〕〔北島万次1995〕などによって指摘されており、偽使や偽書が東アジア諸国の間で複雑に取り交わされていたことが明らかにされている(→「文禄・慶長の役」研究史を参照)。

徳川時代初期の偽使や偽書の指摘は、日朝国交回復期の諸交渉、あるいは1607年・1617年・1624年に朝鮮から派遣された通信使(回答使兼刷還使)、さらに1635年に発覚する国書改ざん事件「柳川一件」に関する研究の一環として、〔中村栄孝1934・1967〕〔田中健夫1965〕〔荒野泰典1981〕などで取り上げられている。また、徳川時代になって実際に三度にわたり「日本国王使」の正使をつとめ、時には朝鮮の都(漢城)まで上京をなしとげた禅僧の規伯玄方(きはくげんぽう)の動向を追いながら、江戸幕府による国書改ざん事件の審議終結までの経過を詳細に明らかにしたのが、〔田代和生1983〕である。

この江戸初期の国書偽造、とくに1607年の回答兼刷還使の来日を促した徳川家康の国書に注目し、議論をさらに深化させたのが高橋公明である。高橋は、幕末期の幕臣近藤重蔵によって「家康国書」偽造説が定説化されたことに疑問を呈し、家康の重臣本多正信に宛てた朝鮮国礼曹参判呉億齢の書簡の内容を検討し、最終的には対馬が改ざんしたにせよ、当初、「家康国書」は存在していたのではないかという新説を提起した〔高橋公明1985〕。ここでは、朝鮮国王名義の国書すり替えも、対馬関係者だけの行為ではなく、徳川政権、厳密にいえば駿府政権による暗黙の了解を得ていたのではないかとも推測する。さらにこの高橋説を継承したのが、関徳基の一連の研究である。関は、家康の国書自体、偽造も改ざんもまったくなされていない真書であるとする〔関徳基1987・1989・1990・1994〕。

「家康国書」をめぐる偽造説・改ざん説・真書説の諸説の整理を行い、とくに高橋の論拠とする呉億齢の書契の再検討を行ったのが米谷均である。米谷は、外交史料集『朝鮮通交大紀』や『続善隣国宝記』に収録された呉億齢の書契を比較し、高橋が論拠とした書契は、それ自体が対馬の手によって大幅に改ざんされたものであると指摘する。したがって高橋説(改ざん説)は勿論のこと、それに依拠した関説(真書説)も成立しないと結論づける〔米谷均1995〕。これによって「家康国書」は、従来の定説(偽造説)が再び優勢となったが、その一方で、依然として真書説を支持する研究者もいる。たとえば〔李啓煌1997〕は、1607年の回答兼刷還使派遣に至る日朝間の「和好」「通好」の交渉過程を丹念に探り、家康国書の存在を強く主張している。ただし米谷説を覆すような、決定的な史料の提示には欠けている。

三、東アジア海域史における偽使研究

1、「夷千島王」論争

偽使の指摘は、どちらかというと日本側史料からなされることが多かったが、1980年代になると『朝鮮王朝実録』をより積極的に活用し、偽使の活動を広範囲な視点から探ろうとする研究動向がみられる。その一つに、朝鮮の成宗13(1482)年、「夷千島王遐叉」の使者と称する宮内卿なる人

物が朝鮮に渡海し、書契を呈して大蔵経の求請をしたという記事の扱いをめぐって偽使論争へ発展する「夷千島王」論争がある。

この論争は、高橋公明が「夷千島王」＝アイヌ部族の首長と理解し、沿海州地域と交流を願うアイヌ部族長「遐叉」が朝鮮へ派遣した使節だと推測したことに始まる〔**高橋公明**1981a・1981b〕。高橋は、宮内郷の提出した書契に注目し、夷千島への仏教伝来ルートの説明や沿海州地域の人を指すと思われる「野老浦」の記事、さらに環日本海域の地理上の説明、進上品としての海草昆布の存在などが記されていたことを、その根拠とした。

その後この見解は、中世の蝦夷地を記す一次史料が少ないこともあり、夷千島王の存在が中世北方史研究に新たな展開を指し示すものとして、特に東北・北海道史の研究者に注目されて大きな反響を呼ぶこととなる。まず高橋の研究に即座に反応した海保嶺夫は、この使節の派遣者を下国(しものくに)安東氏の安東政季(まさすえ)と具体的に比定する一方、「遐叉」という語がアイヌ語で、アイヌ首長を意味している可能性もあると示唆した〔**海保嶺夫**1982〕。海保は、「野老浦」を沿海州辺の部族「挹婁(ゆうろう)」の当て字だと推測する。そしてさらに、夷千島王が「王」と称したことを重要視し、この「王」は「扶桑」＝中世国家とは別個の主権者であり、独立性の強い領域を支配していたと考え、そこから蝦夷地側では中世国家の枠組みにとらわれることのない主体性を持った通商活動も行われていたとも想定する。

高橋・海保の見解を承けて、村井章介は、夷千島王遐叉の朝鮮遣使は不審点が多く、真使ではなく偽使とするのが妥当であるという新説を主張した〔**村井章介**1987〕。これによると、夷千島王の書契に独自の北方地理認識があり、環日本海地域内通交の担い手の中心的役割を果たしていた者であることが考えられ、沿海州方面との交易を行い、アイヌとも密接な津軽十三湊(とさみなと)の安藤氏こそ夷千島王の派遣者ではないかと想定する。そのうえで、使者の宮内卿が室町幕府（日本国王）の使節と行動を共にしていること、当時の朝鮮が国王以外の者に大蔵経下賜をしていなかったことから、夷千島王は津軽安藤氏が大蔵経を獲得するために創作した偽使だと結論する。その後、問題の提起役となった高橋公明は、諸氏の研究成果を取り入れ、夷千島王の使節が偽使であったにせよ、日本列島北部の交易活動と無関係な遣使ではなく、その交易活動の主役である安東（安藤）氏の存在を前提として創作したものではないかと修正している〔**高橋公明**1992〕。

夷千島王の派遣者を安藤（安東）氏とする説は、なかば定説化するかにみえたが、長節子は諸研究を網羅的に整理したうえで、夷千島王の派遣者を安藤氏ではなく対馬島人と推定したことにより、「夷千島王」論争はまた新たな局面を迎えることになる〔**長節子**1994・1995a・2002a〕。長の研究によると、野老浦は「オランカイ」のことではあるが、この点を以て夷千島と野老浦両地域の住民の交流・交易が行われていたとは導き出せないと主張し、北方史の一齣として安易に評価することに疑問を提示する。そして、①夷千島王使の派遣者は、博多・対馬など北部九州の者とするのが妥当であり、②さらに夷千島王使の上京実現に宗貞国が関与していたと考えられること、③また「野老浦」の表記は対馬の者なら知っている朝鮮語を用いて記されていること、④当時の対馬島主をはじめとする対馬の人々が朝鮮通交権拡大のため様々な詐術を弄していた状況などを考え

合わせ、夷千島王の派遣者は島主宗貞国の後援を受けた対馬島人が、交易を通じて獲得した北方の知識や物資を利用することで創作した偽使だと結論づける〔長節子1993・1994・1995a〕。さらに、現在一般に普及している太白山本の『成宗実録』で「遐乂」「遐叉」「遐乂」というように異なる活字で記される夷千島王の王名は、『成宗実録』の原本である鼎足山本の表記によって「遐叉」が正確であるとする〔長節子1995b〕。

「夷千島王」を対馬を主体とする偽使勢力の創作とする長説は、『朝鮮王朝実録』の一字一句にこだわる正確な史料解釈によって導き出した結論であるにもかかわらず、依然として北方史を記す啓蒙書などでは安藤氏説が採用され続けている。そこで長は、安藤氏説を提示する最新の研究をさらに批判する整理を行っている〔長節子2002a〕。しかしそれに対する再批判は、現在に至ってもなされていない。「夷千島王」論は、偽使研究のなかで、夷千島王＝安藤氏説と夷千島王＝対馬島人説の、両論がいまなお平行線を辿ったままである。

ところで、夷千島王遐叉の使節が朝鮮に遣使した頃、それと前後するように「久辺国主李獲」という者の名が朝鮮王朝実録に登場し、夷千島王と類似する事例として取り扱われている。この久辺国主李獲の事例については、村井章介が、久辺国は薩摩商人が大蔵経を手に入れるために創出した偽使とし、薩摩商人は琉球を中心とした東シナ海上で交易活動をする際に獲得した知識によって、久辺国なるものを考案したと指摘している〔村井章介1987〕。ここで村井は、「久辺国主李獲」と「夷千島王遐叉」の遣使が非常に酷似していたことを明らかにしている。「夷千島王遐叉」論争のさらなる発展のために、この久辺国主李獲の派遣者の実態も再検討し直す必要がある。

2、「琉球国王使」論争

近世以前の琉球国は、日本（ヤマト）とは別個の国として、独自に東アジア諸国と通交関係を形成し、特に朝鮮との関係は14世紀末期から確認することができる。ところがこの「琉球国王使」には、真使と偽使が錯綜しており、その実態をめぐって論争が展開されている。

琉球国王使が、実は博多商人によって構成された偽使ではないかという指摘は、〔小葉田淳1939・1963〕〔東恩納寛惇1941〕などの研究によって、かなり以前からみられた。これに朝鮮王朝実録の記事を併せて検討し、時期的に異なる通交形態と偽使のあり方を初めて明らかにしたのが〔田中健夫1966〕である。これによると、琉球・朝鮮間の海域通交は、以下のような4つの時期に区分できるという。

①倭寇中心の時代 （14世紀末期～15世紀前期）
②対馬・九州人による通交中継時代 （15世紀中期）
③偽「琉球国王使」の通交時代 （15世紀後期）
④直接通交の時代から断絶の時代 （15世紀末期～16世紀）

このうち③の偽使の存在は、1471年以後の『成宗実録』より、実際に在位した琉球国王と異なる名義の使節が出現することから確認され、その実態は対馬・博多近辺の者であること、また彼らの持参する貨物はあたかも「琉球国王使」らしく、南海産の物資で占められることが多いとしている。

この田中の提言を受けて村井章介は、③の時代に大蔵経を朝鮮へ求請（朝鮮国王からの返礼物品を品目を指定して要請すること）した使節はすべて博多の人であるとし、②の時代の大半が「真使」とはいえ、対馬や博多の日本商人の請負に依存していたことが、その後の偽使の横行に道を開いたとする〔**村井章介1987**〕。さらに村井は、日朝通交全体の中で15世紀後半を'倭人海商による偽使横行の時代'とし、いっぽう朝鮮側はその素性を疑いながらも倭寇的行動への変移を恐れ、彼らに一応の処遇をもって対応したとする。このように田中・村井は、③の時代の偽使は、琉球国王と直接的接点を持たない勢力によって構成されたとするが、これに異論を唱えたのが高橋公明である。高橋は、③の時代は偽使には相違ないが、これが開始された理由として、琉球王国における第一尚氏から第二尚氏への王朝交替が関係しているのではないかと推測する〔**高橋公明1987b**〕。すなわち偽使の実態は、琉球と何らかの関係を持ちながらも、第二尚氏と親密でない人々によって構成され、そこには琉球人も参加している可能性があるとし、第二尚氏と疎遠な琉球勢力が偽使の主体であったと主張する。

1990年代になり、③の時代の琉球国王使の評価をめぐって、さらに新たな見解が出された。まず和田久徳は、たとえ実在の琉球国王と異なる名義で通交する使節であっても、これは偽使ではなく「真使」だとする〔**和田久徳1992**〕。その理由として、1471年琉球国王使自端西堂と博多商人信重が提案した割符制の存在を重要視し、これが琉球王国の意向で発案されて日本海商に与えられたことは、あくまでも琉朝通交の主導権が請負者の日本海商ではなく琉球側にあったとする。割符の印文には琉球国王の名が用いられており、先代の王名の割符が延長して利用され、それに書契名義を合わせたために実際の王名との間にズレが生じたと推測する。

割符制に初めて着目し、③の時代を真使と結論した和田説は、従来の定説を覆す新説として関心が持たれたが、その前提や考証過程に大きな誤りがあるとして、これを批判的に検証したのが〔**橋本雄1997b**〕である。橋本は、琉朝通交における琉球王国側の外交姿勢を外交文書の様式面から検討し、琉球側は朝鮮王朝との通交では「咨文」による交隣を原則としていたが、③の時代になり琉球国王使の外交文書様式はすべて「書契」になっていたとする。咨文は、明国で二品以上の対等な官庁間で交換される公文書で、個人間の書簡様式が公文書に転用した書契とは、様式的にみてもレベルが異なっており、琉球が書契を使用するようになったのは博多商人信重が琉球咨文をすり替えたことに始まるからであるとしている。また橋本は、符験制（割符によって正規の渡航者である証しとする制度）の沿革を明らかにした上で、この制度は博多商人が琉球王府と独立に考案・運用したもので、彼らはその割符を用いることで書契を偽造し、琉球本国と関わらなくても使節を成立させることに成功したと結論づける。橋本の指摘は、「琉球国王使」の真偽の判定手段に、外交文書の様式を検討の指標としようとする新たな提言がみられる。

四、偽使研究の新展開

1、　図書と木印の発見

「図書」とは、朝鮮通交を願う者たちの要請により、15世紀初めから対馬や壱岐、博多・肥前松浦など九州各地の者に対して朝鮮王朝が造給した銅印である。これを書契に捺して、正規の渡航証とする。印面に名義人の名前が刻まれており、支給された者を「受図書人」という。通交者にとって図書の保有は、朝鮮通交権の獲得を意味することから、偽使の横行にこの図書の不法取得が大きくからんでいるとみられてきた。ところが、これまで日本国内に現存する図書は、〔田中健夫1961〕の研究により、「吉見」図書1個のみしか判明しておらず、偽使研究は文献史料に依存するしか方法がなかった。

これが1990年代後半になり、宗家個人が保有してきた歴史資料のなかから、大量の図書と木印が発見されるに至り、偽使研究はまた新たな局面を迎えることになった。印鑑個々の形状や、造給及び使用に関する歴史的背景などについて詳細に報告した〔田代和生・米谷均1995〕によれば、現存が確認されたのは①図書23個、それに②木印14個10種類である。このうち①は、図書の印面や背面に刻印された造給年次からみて、ほとんどが三浦の乱（1510年）後、大幅に削減された朝鮮通交権の回復をねらった対馬により、深処倭（対馬以外の倭人）名義の図書造給を朝鮮王朝に願い出て許可された時のものであるとしている。対馬島主宗氏のもとへ集められた図書の名義人については、すでに〔中村栄孝1969b〕が『朝鮮送使国次之書契覚』を用いて丹念に復元しており、それと完全に一致することから、依拠した史料および中村の研究の正確さを、実物の発見によってあらためて証明したといえる。

また②は、図書の模造印と思われる物の他に、室町幕府（室町殿＝日本国王）が朝鮮への国書に捺すための「徳有鄰」印（4個）、大内氏に与えられた割符印「通信符」の右符（2個）、さらに朝鮮国王が国書に用いる「為政以徳」印（1個）が含まれている。対馬宗氏が受図書人名義の偽使のみならず、独自に日本国王使や大内殿使の偽使を派遣し、さらに朝鮮国王の国書偽造や改ざんを行っていたことが、現物によって確認できたことになる。このうち「徳有鄰」印は、〔田中健夫1985〕〔佐伯弘次1994〕などの研究により、本物の印鑑の材質（桜材）や文字の配列、印面が陰刻（印字が白く浮き出る）方印であるといった概要は判っていたが、これまで正確な形状は全く不明であった。木印ながらも4種の異なる印影をもつ「徳有鄰」印の発見は、国王印の使い分け方法についても偽使側が充分な知識と技術を持っていたことを伺わせる。さらに木印「為政以徳」印は、1590年豊臣秀吉へ派遣された朝鮮通信使のもたらした国書（宮内庁書陵部所蔵）の「為政以徳」印と印影が合致し、これまで徳川時代初期に始まるとみられていた朝鮮国書の改ざんが、すでに豊臣時代にまでさかのぼることを現物の側から明らかにしている。

偽使の痕跡を実証する図書と木印の発見を承け、これに素早く反応して新たな視角から偽使研究を進展させたのが、橋本雄の一連の研究である。まず〔橋本雄1997a〕は、従来、「真使」であることを前提に議論されてきた15世紀段階の在京有力守護の朝鮮遣使（王城大臣使）もまた、初

期のものを除き全てが偽使であり、その実体が対馬・博多商人らの偽使派遣勢力だと想定されることから、偽使研究の対象を地方だけでなく、中央（京都）にも広げて行う必要があるとする。一部の王城大臣使が偽使ではないかとする説は、かつて〔関周一1991〕により朝鮮人漂流民の送還を事例にとりあげられたことがあるが、橋本によると偽使派遣勢力は、1467年に始まる応仁の乱以降、京都の政治的混乱期に大量の偽「王城大臣使」を創出し、内乱を理由に朝鮮通信使の来日を中止させることによって、その実像が暴かれることを阻止したと具体的に明らかにしている。また既に触れたように、橋本は15世紀段階の偽「琉球国王使」も博多商人・対馬の偽使派遣勢力によって創出されていたと指摘しており〔橋本雄1997b〕、偽使創出はかなり広範囲に及んでいることを見出している。さらに〔橋本雄1998〕は、1474年に発足した象牙符（割符）による室町幕府と朝鮮の間で成立したいわゆる「牙符制」について、既に日明間で運用されていた日明勘合とリンクさせて捉え、室町将軍の「符験外交体制」と称して論じている。

続いてこの研究を進展させたのが、長節子である。長は、宗成職（しげもと）が対馬島主に就いた15世紀半ば以降、深処倭名義の朝鮮通交が急激に増加し、中には年に数回も渡海する名義人も出ていることから、偽使横行の背景に宗成職という島主の出現に注意を喚起することが重要であると指摘する〔長節子1998〕。続いて長は、田代・米谷論文で紹介された宗家旧蔵の印鑑群にも注目し、とくに「弾正小弼源弘」と刻した木印の性格について新たな分析を行っている〔長節子2002b〕。これによるとこの木印は、官途（官吏の職位）名を刻んだ不自然な印文であること、縦49㎜・横46㎜もある大きい印であること、さらに朝鮮における倭人通交者の格付け・接待の等級・下賜する図書の大きさには一定度の相関関係を認めることなどを考慮し、肥前松浦地方領主で「諸酋」に過ぎない源弘に対して実際に木印にあるような図書が下賜されたはずはなく、したがってこれは模造印ではなく、対馬で新たに「源弘」名義の偽使を創出する際に、書契に捺すために創作された印であったと指摘する。その上で、この木印の製作年は「源弘」名義の朝鮮遣使が始まった1454年であり、これこそ対馬島主宗成職による深処倭名義を利用した朝鮮通交権入手政策を物語る確かな物証であると結論づける。

問題提起者の一人である米谷均もまた、宗家旧蔵の図書・木印群について、『朝鮮王朝実録』・対馬の古文書類・偽使を担う禅僧が記した渡海日記などを利用することによって、三浦の乱（1510年）後、16世紀朝鮮通交の場で対馬が自らの通交拡大を目論むため、各種通交名義の無断借用や架空名義の創出を繰り返し、通交権の独占を達成していく過程を具体的に描き出している〔米谷均1998〕。これによれば、これら偽使体制を可能にしたのは、朝鮮側の通信使派遣の中断によって日本側の正確な実態が把握できなくなり、対馬で操作された情報のみに依拠したことによるという。16世紀の対馬が、朝鮮や日本本土勢力に対して大がかりな情報操作を行うことで、対馬―朝鮮ラインの閉鎖性を確立し、朝鮮に対して日本情報の独占を維持するために、朝鮮人漂流民を送還しようとする日本本土勢力に対して妨害工作を行っていた事実も明らかにしている。また〔米谷均2002a〕は、木印の発見によって明らかにされた1590年豊臣秀吉宛朝鮮国王の国書について、どの部分がどのように改ざんされていたかを、外交関係記録などによって克明に追跡し

ている。

2、「朝鮮遣使ブーム」論争

朝鮮国王世祖期（在位1455～68年）に、自らの王権を荘厳にするために仏教上の奇瑞現象を喧伝し、これを祝賀すると称して日本の広い地域から、集中的に多数の使節が朝鮮へ派遣されるという現象が起きた。これら一連の使節について初めて触れた田中健夫は、その全てを「真使」とみなし、かれらの背景に朝鮮との通交を支える国内商業圏の存在、あるいは1467年に始まる応仁の乱の影響があったことを指摘している〔田中健夫1975〕。これに対して、中村栄孝は一部を真使とみなすが、「祝賀国王使」と称する使節、および国王の要請を託された僧侶の護送を名目とする「寿藺護送使」は、戦乱の世に乗じて名目を借りた偽使だとした〔中村栄孝1969b〕。

この事例は、1980年代になって高橋公明が「朝鮮遣使ブーム」と名付けたことにより、センセーショナルな話題性をもつ論争として学界を賑わすことになる。高橋の一連の研究によると、同じ頃頻繁に渡航した幕府要職者による朝鮮渡航の事実を突き合わせたところ、「祝賀国王使」は偽使かも知れないがその他の遣使は真使であり、この背景に田中健夫も指摘するように、当該期の日本人の中に朝鮮を偉大な国とみなす「朝鮮大国観」が広範囲に存在していたのではないかと強調している〔高橋公明1982a・1982b・1987a・1987b〕。これに対し、村井章介は、高橋のいう「朝鮮大国観」の存在を批判し、遣使ブームなるものは先述した「夷千島王」「久辺国主」「偽琉球国王使」と同様、朝鮮に回賜品を求めるための方便であり、経済的要因を第一に考えるべきだとした〔村井章介1987・1988a〕。

この「朝鮮遣使ブーム」論争は、1990年代の後半、宗家旧蔵の図書と木印の発見に伴う偽使研究の再燃により、研究者の新たな注目を浴びることになる。〔橋本雄1997a〕は、偽使勢力の範囲は中央（京都）が派遣する大臣使にまで及んでおり、高橋公明の指摘する「朝鮮遣使ブーム」の中核を占める「王城大臣使」の全てが偽使と規定されることになるとする。すなわち「朝鮮遣使ブーム」なるものは、偽使通交を容易にする好条件の揃った特殊な時期の歴史現象であり、基本的には偽使問題の一環として複眼的に捉える必要性があると主張する。

また長節子は、この時期の「祝賀国王使」を、対馬宗氏が15世紀中頃から進めてきた深処倭名義を利用しての朝鮮通交権拡大という外交路線上の一環として位置づけるよう問題を提起する〔長節子1998〕。さらに長は、祝賀国王使の渡航以前に通交した者たちを分析し、彼らの多くが実在を確認できない人々であること、守護や守護代クラスの有力者・朝鮮通交に敏感なはずの歳遣船定約者や受職人による遣使がほとんどないことなどを疑問点として提示し、この時期の朝鮮遣使のほとんどが偽使であることを明らかにした〔長節子2002d〕。これによると、対馬宗氏が世祖の奇瑞現象を朝鮮通交権拡大の好機と捉え、これまでに通交歴を持たない零細な者の通交名義を騙り、僅かな献上品と引き換えに、朝鮮側の接待と回賜品や過海糧（渡航手当）を獲得する目的で、組織的に派遣された使節団であったと結論づける。この結論は、王城大臣使を偽使とする橋本説とリンクすることで、「朝鮮遣使ブーム」論争や「朝鮮大国観」の存在となるべき前提条件を覆

すものとして注目されている。加えて長は、朝鮮側の一次史料である『海東諸国紀』の扱いにも警鐘を鳴らしている。そこに記載される通交者の大部分が、偽使である可能性が高まったからである。

個別の通交者ごとの詳細な真偽の検討は、最近、始まったばかりである。たとえば石見国周布(すふ)氏について考察した〔藤川誠1999〕によると、周布氏三代にわたる兼仲・兼貞・和兼の朝鮮通交は、兼仲・兼貞の時期から不安定な状態にあり、その背景に九州地域の争乱に伴う石見国国人に対する室町幕府の軍事動員の影響があったことを指摘する。ここから、15世紀半ば頃に集中的に派遣された「兼貞」名義の使節は、争乱集結を受けて朝鮮に渡海した偽使であると断定する。16世紀末、対馬商人が周布「和兼」名義の図書を所持していたことが確認されていることから、周布氏の通交権は遅くとも15世紀末には対馬勢力の手に移っていたと推測する。

3、 偽書と僧侶

偽使研究は、使節が必ず携帯する外交文書を分析対象とすることで、古文書学的分野における進展が顕著になっている。一部の書契については、これまでの長節子の一連の研究によって考察が行われてきたが〔長節子1997・1982・1987・1993・1994〕、この分野の研究もまた1990年代後半に至ってより活発になってきた。

まず基本的なこととして、正規の外交文書なるものが、具体的にどの部署で、誰によって作成されるかについて考察したのが、〔橋本雄1997c〕である。ここでは15世紀後半、足利義政による「遣朝鮮国書」の作成を事例に、国書の料紙、草案作成部署である蔭涼職における発給過程、「徳有隣」印の捺印場所など、国書(真書)の作成・発給状態を明らかにしている。いっぽう伊藤幸司は、日本国内に現存する日朝外交文書の原本にあたり、書契の料紙・文字・印・折り方等々を具体的に分析することによって、とくに対馬宗氏の手になる偽書の実態を明らかにしている〔伊藤幸司2002d〕。これによると、対馬で使用された偽造・改ざん書契の料紙には竹紙が多く用いられ、貼り合わせられた紙端は現在剥離しているものが多く、朝鮮側書契(真書)に比べると印面がクリアーでないという。対馬で作成された書契の完成度には明らかなバラツキがみられ、そこから通交名義の格によって起草者の知識力、技術者の熟練度、素材の品質などを、臨機応変に変えていたのではないかと推測している。

米谷均は、16世紀後半の対馬宗氏の文引(渡航証)と書契の雛形を掲げ、さらに朝鮮書契と比較しながら、使用語句・文体の特徴を考察している〔米谷均2002b〕。ここでは、書契型文書の様式的な特徴が再確認されるほか、朝鮮側から厚遇を得ようとして、使者があたかも「朝鮮大国観」を抱いているかのような文言を多用し、これこそ対馬による一種の外交交渉のためのテクニックであると指摘する。また最近、長節子が都城島津家に所蔵される弘治13(1500)年琉球国王宛朝鮮国書の分析を行っている〔長節子2002e〕。この国書は、これまで「真書」とされてきたが、長の研究によると、紙質・文字などに疑問点が多く、特に対馬で多用される異体字の使用がみられること、あるは朝鮮から琉球に送還された漂流民の証言などから、これもまた対馬宗氏による偽造国書ではな

いかと初めて指摘している。

外交文書の研究とあわせて、これを作成し、あるいは偽使の一員となって朝鮮へ渡航した僧侶についても研究が進み、その実態が次第に明らかにされてきている。これまで偽使を支えた僧侶に関する研究は、対馬以酊庵の開祖景轍玄蘇について触れた〔長正統1963〕、あるいは国書改ざん事件に連座した以酊庵第二世規伯玄方の生涯を明らかにした〔田代和生1983〕など、16世紀末～17世紀初め、つまり偽使の時代としては末期に当たる時期のものが多かった。

しかし最近の研究動向としては、偽使勢力を創出させた時期である15世紀後半ごろの禅僧、具体的には1463年日本国王使（天竜寺勧進船）副使として朝鮮に渡海した後、宗氏に請われて対馬に逗留した天竜寺妙智院系の五山僧、仰之梵高という僧侶の存在が注目されている。この僧侶を初めて日朝外交と結びつけたのは〔泉澄一1973〕である。泉は対馬の郷土史家の手になる著作や関連史料を用い、対馬臨済の祖となった僧侶の事績を紹介した。このことをより中世史の視点から、また偽使研究と結びつけたのが長節子・橋本雄・伊藤幸司らの研究である。まず〔長節子1987〕は、梵高唯一の現存史料である『順曳大居士即月大姉肖像賛并序』を分析し、宗氏の対馬支配と朝鮮通交権益の確立、ひいては深処倭名義の偽使増加に、この僧侶の役割がいかに重要であったかを明らかにする。〔橋本雄1997a〕は、中央（京都）政府の派遣する王城大臣使が、なぜ偽使にとってかわられたか、その背後に実際に日本国王使副使を勤めた梵高の存在があったとする。橋本は、梵高を‘偽使創作の主要スタッフ’と位置づけ、宗氏が大量の文引や書契を起草できる基盤がこの時期から形成されていったと指摘する。

偽使の時代を、外交僧の活動と密接に関連づけ、対馬宗氏のもとで外交文書を起草した人物を体系的に抽出した上で、梵高はその後の外交僧の系譜の基盤を作ったところにその画期的性格があるとしたのが、伊藤幸司の一連の研究である。伊藤が〔伊藤幸司1999a・1999b・2002a・2002c・2002d〕などの論文、あるいは集大成した〔伊藤幸司2002b〕によって明らかにしたことを要約すると、①梵高の所属する夢窓派華蔵（けぞう）門派というグループが、室町幕府外交を担う主要な禅宗勢力であり、それが宗氏に抜擢されたことによって真使と偽使を併存させる禅宗勢力の基盤がととのった、②京都五山僧であった梵高が、偽使創設に必要な高度な外交技術や情報網を対馬へ提供し、偽日本国王使・偽巨酋使などを担う人材育成も手がけていた、③梵高後、対馬から偽使として実際に渡海した使僧を検出すると、とりわけ三浦の乱（1510年）後、大幅に縮小した朝鮮通交権を回復する交渉過程で、使僧たちは歳遣船増額、深処倭名義の通交復活、授職の請願などあらゆる手段を駆使して、宗氏の通交権益拡大に協力していた、④これらの偽使を担っていたのが大内氏領国を含む玄海灘地域で活動する禅僧であり、その主要勢力が博多聖福寺を中心とする臨済宗幻住派の禅僧であった、⑤この臨済宗幻住派の禅僧は、当該期の外交を担う禅宗勢力として最も適応能力が高く、これが近世初期の以酊庵玄蘇・玄方の現出へとつながった、とする。

僧侶の活動から、室町時代・戦国期・近世初期にかけての偽使のありかたをみていく研究は、すでに橋本雄・米谷均らも行っている。たとえば〔橋本雄1998〕は、将軍権力と外交権のありかたを、「日本国王使」を名乗る真使と偽使の全貌を明らかにした上で、博多聖福寺周辺の臨済宗幻

住派の僧侶が対朝鮮貿易のみならず遣明船貿易にも関与していく過程をとらえ、中世後期の外交が「幕府外交」から「地域交流」へと転回する全体像を描いている。また〔米谷均1998〕は、16世紀末期偽使として活躍し、数少ない日本人による朝鮮紀行文『右武衛殿之使朝鮮渡海之雑藁』『朝鮮往還日記』『西征日記』を残した対馬の僧侶天荊について、使節の背景や派遣過程、朝鮮での貿易や詩文の応酬など、偽使の実像を詳細に分析している

またこれは僧侶ではないが、〔関周一1997〕により、当初、真使の日本国王使を請負っていた博多商人宗金一族が、次第に対馬と連携し偽使創出に関わっていたことが指摘されている。この宗金一族の活動は、〔伊藤幸司2002a〕が偽使の時代の経済的背景を探るためにとりあげている。伊藤はその要因として、室町幕府による支配能力の限界を指摘している。すなわち幕府による九州支配は決して強力とはいえず、そのため外交活動は前代以来豊かな外交の知識と実績を蓄積してきた博多勢力に依存しなければならず、そうした幕府の先導力の限界が、朝鮮通交の場における偽使創作を可能としたとしている。

五、今後の課題

以上の偽使研究整理をふまえ、今後、期待される研究課題を列記しておく。

1、 現存資料の科学的分析

偽使は、他人名義を騙る反面、自らの実像は意図的に隠そうとする。このため偽使の実態に迫るには、文献史料からの研究だけでは限界があり、従来の歴史学の手法に加え、他領域の分野の手法を積極的に用いることが必要とされる。幸いにも、現在、書契・図書・木印といった、偽使が実際に使用あるいは捏造した資料が多く発見されている。かつて偽使の周辺にあって、その痕跡を明白に留める現存資料を、可能な限り精密な科学的手法（非破壊分析も含めた科学分析、顕微鏡・エックス線・赤外線による検査等）によって、新たな研究素材を得ることが望まれる。

2、『海東諸国紀』等による名義人の確定

偽使は、まだその全てが判明している訳ではない。偽使の存在を確定するためには、通交名義者の一人一人の行動を追跡するなどの微視的研究が必要とされる。それには、朝鮮側の一次史料である『海東諸国紀』や『朝鮮王朝実録』に描かれる日本側通交者を、当該期の日本側一次史料や西日本全域のフィールド調査と重ねあわせ、その真偽を逐一確定していかなければならない。

3、 偽使を支える人的・経済的基盤の解明

この課題は2の考察とも関係するが、偽使派遣を背後で支えていた人的・経済的基盤がまだ充分に解明されていない。多くの偽使の背後に対馬や博多の勢力があったとされるが、その内実は

非常に複雑である。偽使の動きとともに流動する物資や情報は、単に玄界灘地域で完結するものではなく、そこからさらに外の世界へとつながっている。朝鮮との通交貿易が、日本国内及び東アジア海域の流通・経済の動向とどのような関係にあったのか、偽使を東アジア史の視角から考察することが重要な課題である。

4、 朝鮮王朝の偽使対策

朝鮮王朝の指向する「外交秩序」のなかから、偽使の時代をどのようにとらえるのか、王朝の偽使対策と併せて考察することが必要である。偽使が作り上げた虚構の通交体制に、王朝側はその素性を疑いながらも、倭寇的行動の再燃を恐れて多分に黙認していたきらいもある。偽使を含む倭人受入れに対する朝鮮側の意識、倭人対策と野人対策の相違と共通点など、朝鮮史の視点からみた実証的な研究が課題とされる。

5、 世界史的視野からみた偽使研究

偽使の行為は、中世日朝通交の場にのみ存在する特異な事例ではない。この類のことは、世界史的視野からみても数多く確認することができる。例えば、印鑑の偽造や違法的使用、公文書や通行証の偽造や改ざん、権力者への名義すり替えに伴う様々な違法行為は、程度の差こそあれ、人間の欺瞞的行動の現れとして、洋の東西を問わず存在が確認されている。偽使行為が生まれる歴史的背景、その存続を許容する環境、国家的な体制と国際法との関連などの視野から、偽使の国際的比較研究も今後の課題として残されている。

偽使 文献目録

No.	刊行年	著 者	表題	出 典
1	1934	中村栄孝	「江戸時代の日鮮関係」	『岩波講座日本歴史』旧版、岩波書店〔中村栄孝 1969b 収録〕
2	1937	小葉田淳	「足利時代琉球との経済的及び政治的関係(1)(2)(3)」	『史学雑誌』48-2・3・4〔小葉田淳 1939 収録〕
3	1939	小葉田淳	『中世南島通交貿易史の研究』	日本評論社〔小葉田淳 1939 収録〕
4	1941	東恩納寛惇	『黎明期の海外通交』	帝国教育会出版部〔東恩納寛惇 1979 収録〕
5	1954	田中健夫	「中世日鮮交通における貿易権の推移」	『史学雑誌』63-3〔田中健夫 1959 収録〕
6	1959	田中健夫	『中世海外交渉史の研究』	東京大学出版会
7	1959	中村栄孝	「「右武衛殿」の朝鮮遣使」	『朝鮮学報』14〔中村栄孝 1965 収録〕
8	1961	田中健夫	『倭寇と勘合貿易』	至文堂
9	1963	長正統	「景轍玄蘇について――一外交僧の出自と法系――」	『朝鮮学報』29
10	1963	小葉田淳	「琉球・朝鮮の関係について」	田山方南先生華甲記念会『田山方南華甲記念論文集』〔小葉田淳 1993 収録〕
11	1965	田中健夫	「鎖国成立期日朝関係の性格」	『朝鮮学報』34〔田中健夫 1975 収録〕
12	1965	中村栄孝	『日鮮関係史の研究』上巻	吉川弘文館
13	1966	田中健夫	「朝鮮・琉球間における中世の対馬」	『朝鮮学報』39・40 合併号〔田中健夫 1975 収録〕
14	1967	中村栄孝	「外交史上の徳川政権」	『朝鮮学報』45〔中村栄孝 1969b 収録〕
15	1969a	中村栄孝	『日鮮関係史の研究』中巻	吉川弘文館
16	1969b	中村栄孝	『日鮮関係史の研究』下巻	吉川弘文館
17	1970	増田勝機	「室町期に於ける薩摩の対朝鮮貿易」	『研究紀要』鹿児島短大・5
18	1972	田村洋幸	「室町前期の日朝関係―十四世紀末～十五世紀前半における偽使を中心として―」	福尾教授退官記念事業会編『日本中世史論集』吉川弘文館
19	1973	泉澄一	「室町時代・対馬における仰之梵高和尚について―対朝鮮交易書契僧の始祖―」	『対馬風土記』10
20	1973	田中健夫	「琉球に関する朝鮮史料の性格」	『日本歴史』300〔田中健夫 1975 収録〕
21	1975	田中健夫	『中世対外関係史』	東京大学出版会
22	1977	長節子	「一五九〇・九一年田平源兼と朝鮮礼曹との往復書簡をめぐって」	『西南地域史研究』1〔長節子 1987 収録〕
23	1979	東恩納寛惇	『東恩納寛惇全集』第 3 巻	第一書房
24	1981	荒野泰典	「大君外交体制の確立」	『講座日本近世史』2、有斐閣〔荒野泰典 1988 収録〕

25	1981	高橋公明	「夷千島王遐乂の朝鮮遣使について」	『年報中世史研究』6
26	1982	長節子	「一六世紀対馬の朝鮮通交独占体制の一考察―牧山源正印を中心として」	『村上四男博士和歌山大学退官記念朝鮮史論文集』〔長節子 1987 収録〕
27	1982	海保嶺夫	「「夷千島王」の対朝鮮交渉―幕藩制成立以前における夷千島・扶桑・朝鮮王国の「国」意識」	『地方史研究』180〔海保嶺夫 1984 収録〕
28	1982a	高橋公明	「外交儀礼よりみた室町時代の日朝関係」	『史学雑誌』91-8
29	1982b	高橋公明	「村井報告批判」	『歴史学研究』510
30	1982	村井章介	「中世日本の国際意識について」	『歴史学研究』1982 年度大会別冊号〔村井章介 1988b 収録〕
31	1983	田代和生	『書き替えられた国書―徳川・朝鮮外交の舞台裏―』	中央公論社
32	1984	海保嶺夫	『近世蝦夷地成立史の研究』	三一書房
33	1985	高橋公明	「慶長十二年の回答兼刷還使の来日についての一考察―近藤守重説の再検討―」	『研究論集』名古屋大・文・XCⅡ史学 31
34	1985	田中健夫	『対外関係と文化交流』	思文閣出版
35	1987	長節子	『中世日朝関係と対馬』	吉川弘文館
36	1987a	高橋公明	「朝鮮遣使ブームと世祖の王権」	田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館
37	1987b	高橋公明	「朝鮮外交秩序と東アジア海域の交流」	『歴史学研究』573
38	1987	閔徳基	「家康期の朝・日講和交渉と対馬(1)」	『史学研究』(韓国ソウル)39〔閔徳基 1994 収録〕
39	1987	村井章介	「朝鮮に大蔵経を求請した偽使について」	田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館〔村井章介 1988b 収録〕
40	1988	荒野泰典	『近世日本と東アジア』	東京大学出版会
41	1988	井原今朝男	「中世善光寺の一考察」	『信濃』40-3〔井原今朝男 1999 収録〕
42	1988a	村井章介	「中世人の朝鮮観をめぐる論争」	『歴史学研究』576〔村井章介 1988b 収録〕
43	1988b	村井章介	『アジアのなかの中世日本』	校倉書房
44	1989	閔徳基	「家康期の朝・日講和交渉と対馬(2)」	『史学研究』(韓国ソウル)40〔閔徳基 1994 収録〕
45	1990	閔徳基	「朝鮮後期朝・日講和と朝・明関係」	『国士館論叢』(韓国国史編纂委員会)12〔閔徳基 1994 収録〕
46	1991	関周一	「十五世紀における朝鮮人漂流人送還体制の形成	『歴史学研究』617
47	1992	高橋公明	「夷千島王」	『日本史大事典』1、平凡社
48	1992	和田久徳	「琉球と李氏朝鮮との交渉―一五世紀東アジア・東南アジア海上交易の一環として―」	石井米雄ほか編『東南アジア世界の歴史的位相』東京大学出版会
49	1993	青木勝士	「肥後国菊池氏の対朝交易―『李朝実録』『海東諸国紀』記事の分析から―」	『戦国史研究』26
50	1993	長節子	「夷千島王遐又の朝鮮への書契にみえる「野老浦」」	『地方史研究』244
51	1993	小葉田淳	『増補中世南島通交貿易史の研究』	臨川書店
52	1993a	村井章介	『中世倭人伝』	岩波書店

53	1993b	村井章介	「十五～十七世紀の日琉関係と五山僧」	永原慶二編『中世の発見』吉川弘文館〔村井章介 1995 収録〕
54	1994	長節子	「夷千島王遐叉の朝鮮遣使をめぐって(1)」	『紀要』九州産業大・国際文化・1〔長節子 2002c 収録〕
55	1994	佐伯弘次	「室町前期の日朝関係と外交文書」	『九州史学』111
56	1994	閔徳基	『前近代東アジアのなかの韓日関係』	早稲田大学出版部
57	1995a	長節子	「夷千島王遐叉の朝鮮遣使をめぐって(2)」	『紀要』九州産業大・国際文化・2〔長節子 2002c 収録〕
58	1995b	長節子	「朝鮮へ遣使した「夷千島王」の王名―遐叉・遐叉・遐乂―」	『西南地域史研究』10〔長節子 2002c 収録〕
59	1995	田代和生 米谷均	「宗家旧蔵「図書」と木印」	『朝鮮学報』156
60	1995	村井章介	『東アジア往還―漢詩と外交―』	朝日新聞社
61	1995	米谷均	「近世初期日朝関係における外交文書の偽造と改竄」	『紀要』早稲田大・院・文・41
62	1996	海保嶺夫	『エゾの歴史―北の人びとと「日本」―』	講談社
63	1997	李啓煌	「「和好」・「通好」関係の成立」	同著『文禄・慶長の役と東アジア』臨川書店
64	1997	関周一	「室町幕府の朝鮮外交―足利義持・義教の日本国王使を中心として―」	阿部猛編『日本社会における王権と封建』東京堂出版
65	1997	仲尾宏	『朝鮮通信使と徳川幕府』	明石書店
66	1997a	橋本雄	「中世日朝関係における王城大臣使の偽使問題」	『史学雑誌』106-2
67	1997b	橋本雄	「朝鮮への「琉球国王使」と書契・割符制―十五世紀の偽使問題と博多商人―」	『古文書研究』44・45 合併号
68	1997c	橋本雄	「「派朝鮮国書」と幕府・五山―外交文書の作成と発給」	『日本歴史』589
69	1997a	村井章介	「「僧良心」を追って―東アジア世界と信州―」	『信濃毎日新聞』(1/14)〔村井章介 1997c 収録〕
70	1997b	村井章介	『海からみた戦国日本―列島史から世界史へ―』	筑摩書房
71	1997c	村井章介	『国境を超えて―東アジア海域世界の中世―』	校倉書房
72	1997a	米谷均	「一六世紀日朝関係における偽使派遣の構造と実態」	『歴史学研究』697
73	1997b	米谷均	「漂流民送還と情報伝達からみた16世紀の日朝関係」	『歴史評論』572
74	1998	長節子	「三浦の乱以前対馬による深処倭通交権の入手」	『産業経営研究所報(九州産業大学)』30〔長節子 2002c 収録〕
75	1998	橋本雄	「室町・戦国期の将軍権力と外交権―政治過程と対外関係―」	『歴史学研究』708
76	1998	米谷均	「中世後期、日本人朝鮮渡海僧の記録類について」	『青丘学術論集』12
77	1999a	伊藤幸司	「中世後期の臨済宗幻住派と対外交流」	『史学雑誌』108-4〔伊藤幸司 2002b 収録〕
78	1999b	伊藤幸司	「室町幕府の外交と夢窓派華蔵門派―「日本国王使」の外交僧をめぐって―」	『朝鮮学報』171〔伊藤幸司 2002b 収録〕
79	1999	井原今朝男	『中世のいくさ・祭り・外国との交わり―農村生活史の断面―』	校倉書房
80	1999a	金光哲	「朝鮮使節―回答兼刷還使前夜―」	『史学論集――仏教大学文学部史学科創設三十周年記念――』仏教大学文学部史学科
81	1999b	金光哲	「回答兼刷還使」	『東アジア研究』25
82	1999	藤川誠	「石見国周布氏の朝鮮通交と偽使問題」	『史学研究』226

83	2002a	伊藤幸司	「臨済宗幻住派の動向と室町幕府の外交姿勢―京都の宗金と博多の宗金をめぐって―」	同著『中世日本の外交と禅宗』吉川弘文館
84	2002b	伊藤幸司	『中世日本の外交と禅宗』	吉川弘文館
85	2002c	伊藤幸司	「中世後期における対馬宗氏の外交僧」	『年報朝鮮学』8
86	2002d	伊藤幸司	「現存史料からみた日朝外交文書・書契」	『九州史学』132
87	2002a	長節子	「夷千島王遐叉の朝鮮遣使に関する最近の研究について」	同著『中世 国境海域の倭と朝鮮』吉川弘文館
88	2002b	長節子	「宗家旧蔵「弾正小弼源弘」木印の性格」	同著『中世 国境海域の倭と朝鮮』吉川弘文館
89	2002c	長節子	『中世 国境海域の倭と朝鮮』	吉川弘文館
90	2002d	長節子	「朝鮮前期朝日関係の虚像と実像―世祖王代瑞祥祝賀使を中心として―」	『年報朝鮮学』8
91	2002e	長節子	「弘治十三年正月日付琉球国王宛朝鮮国王李(燕山君)国書の性格」	『東北アジア文化学会第五回国際学術シンポジウム』
92	2002	関周一	『中世日朝海域史の研究』	吉川弘文館
93	2002a	米谷均	「豊臣政権期における海賊の引き渡しと日朝関係」	『日本歴史』650
94	2002b	米谷均	「文書様式論から見た一六世紀の日朝往復書契」	『九州史学』132